



(1) 緑友ハーモニー26年度運営体制

幹事長: 小林 力 (5回生)

幹事楽譜係: 岡真理子 (14回生)

幹事会計係: 清水あつ子 (14回生) 1

パートリーダー: 矢島多恵子 (ソプラノ)、佐藤睦子 (アルト)

河野通久 (テナー)、上田昌紀 (バス)

(2) 今後の練習日程

1月16日 (金)	13:00 ~ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
1月16日 (金)	15:30 ~ 16:30	ミニ総会: 中央町社会教育館・102号研修室
1月23日 (金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・レクホール (本館3階)
2月20日 (金)	13:00 ~ 15:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)
2月20日 (金)	15:30 ~ 16:30	話し合い 緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)
2月27日 (金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)

<u>3月6日(金)</u>	10:00 ～ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
3月13日(金)	13:00 ～ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
<u>4月17日(金)</u>	13:00 ～ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
4月24日(金)	10:00 ～ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
5月8日(金)	10:00 ～ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
5月22日(金)	13:00 ～ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
6月12日(金)	10:00 ～ 12:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室(別館2階)
<u>6月19日(金)</u>	13:00 ～ 15:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室(別館2階)
7月10日(金)	10:00 ～ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
7月24日(金)	13:00 ～ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
8月14日(金)	お盆休み	
8月28日(金)	13:00 ～ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
9月11日(金)	10:00 ～ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
9月25日(金)	13:00 ～ 15:00	中央町社会教育館・レクホール 押見先生ご指導
10月9日(金)	10:00 ～ 12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
<u>10月16日(金)</u>	13:00 ～ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
<u>10月30日(金)</u>	13:00 ～ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
<u>11月6日(金)</u>		
11月13日(金)		
<u>11月20日(金)</u>		
11月27日(金)	午前	リハーサル 小山台会館2階音楽室
11月27日(金)	午後	コンサート 小山台会館3階大ホール
12月4日(金)	11:30 ～ 14:00	コンサート打ち上げ/クリスマス会 奥沢 NaKaMa

註1: 表中下線の日は奇数週金曜日です。ご注意ください。

註2: 今年もコンサートを小山台会館で開催します。

註3: 10月、11月はコンサートに備えて月3回の練習になります。

註4: 今年のクリスマス会はコンサートの打ち上げを兼ねて12月第1金曜日に奥沢のイタリアン・レストラン NaKaMa で開催します。

(3) コンサートとクリスマス会

今年もコンサートを開催します。日時は11月27日午後、会場は昨年ミニコンサートを開催した小山台会館3階大ホールです。曲目の中ではヴィヴァルディの見た日本の四季が目玉で、ヴァイオリン奏者も加わってくださるそうです。

クリスマス会はコンサートの打ち上げを兼ねて、通常より1週間早めて12月の第1金曜日4日に奥沢のイタリアン・レストラン NaKaMa で開催します。

(4) 6月号のひまつぶし ドレスデン・フィルハーモニー 小林 力

今月もドイツのオーケストラだ。6月28日にドレスデン・フィルハーモニーのコンサートをみなとみらいホールへ聴きに行った。

曲目は、ヴォーン・ウィリアムズ: トマス・タリスの主題による幻想曲、ブルッフ: ヴァイオリン協奏曲第1番 ト短調 Op.26 [ヴァイオリン: 榎本大進]、ブラームス: 交響曲第4番 ホ短調 Op.98。指揮は首席指揮者のサー・ドナルド・ラニクルズ。

ヴァイオリン独奏者の榎本大進は、3月に聴いたベルリンの7人のヴィルトゥーゾたちによるコンサートのひまつぶしで経歴を詳しく紹介したが、もう一度思い出してみよう。榎本大進は父親の仕事の関係で1979年イギリスのロンドンで生まれ、3歳からヴァイオリンをはじめた。父の転勤によりニューヨークへ移り、7歳の時にジュリアード音楽院のプレカレッジに入学、11歳の時にドイツのリューベック音楽大学に特待生として招かれ、同年第4回・バッハ・ジュニア音楽コンクールで第1位を獲得した。1991年以降数々の国際コンクールで優賞、例えば1996年の国際コンクール、フリッツ・クライスラー、ロン＝ティボーで1位を獲得、その他5つの権威ある国際コンクールで全て優勝している。そして、2010年31歳の若さでベルリン・フィルの第1コンサートマスターに抜擢された逸材なのだ。傍ら、兵庫県で「ル・ポン国際音楽祭〜赤穂・姫路」の音楽監督を務めている47歳の俊英である。使用楽器は、株式会社クリスコから貸与された1744年製ガアルネリ・デル・ジェス「ド・ペリオ」である。これはガアルネリが最晩年に製作し、ヴァイオリニスト「ド・ペリオ」が所有していた歴史上極めて稀少かつ重要な名器だそうである。

1曲目は、プログラム解説によれば、イギリス国民主義音楽の代表格ヴォーン・ウィリアムズ(1872～1958)が1910年に遅まきながら書いた出世作である。彼は「イギリス讃美歌集」を編纂した際に知った“イギリス教会音楽の父”トマス・タリス(1505年頃～1585)の旋律「カンタベリー大僧正のための作品」に惹かれて、その主題に基づく幻想曲を作曲した。弦楽器だけを3群に分けて、各群の単奏、応答、全奏の混合によって神秘的な美しさが醸し出される。今までに聴いたことのない曲想で、なんとも不思議な感覚が呼び覚まされる。

私が楽しみにしていたのが、樫本大進の独奏による5大ヴァイオリン協奏曲のひとつブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番だ。ブルッフをベートーヴェン、ブラームス、メンデルスゾーン、チャイコフスキーに次ぐ5大ヴァイオリン協奏曲に加えるかは賛否両論あるところだが、私個人としては5作品の中で最も好きな曲である。CDをお聴きになりたい方は、Midoriがベルリン・フィルと共演したライブ版をお勧めする。ちなみに、ブルッフは3つのヴァイオリン協奏曲を書いているが、今日のプログラムの第1番以外は演奏されることは皆無だ。ブルッフ自身はそれに不満をもっていたようだが、聴き比べてみるとその差は歴然としている。

その第1番の冒頭のヴァイオリン独奏によるパッセージの美しさは息を呑む。ティンパニーがピアニッシモで2小節奏で、続けて木管とホルンが3小節導入したあと独奏ヴァイオリンが奏でる旋律は魂を揺さぶる。まるで人が人を好きになった時のあの胸を締め付けられるような感覚を惹き起こす。あるいは深い悲しみの心の琴線に触れられるような感覚。譜の読める方は下の楽譜の独奏ヴァイオリンのパッセージを歌ってみてください。美しさがおわかりになると思います。

I. Vorspiel
Allegro moderato

Pk. Holzbl. Hn.

pp *p*

Solo Viol.

f *rit.*

第1楽章の再現部で再び冒頭の美しいメロディーが奏でられ、短いカデンツァを経てオーケストラが力強く受け継ぎ、やがて見え入るようにピアノシモになると、そのまま引き続いて第2楽章のこれまた美しい下記主題がヴァイオリン独創によって奏でられる。人間は悲しいものです。その悲しみを第2楽章はあたたかく包み込む。癒しの楽章だ。



そして第3楽章。なんと勇気を与えられることか。人間に音楽があつてよかったとつくづく思わせる作品だ。

この第3楽章冒頭のヴァイオリン独奏はブラームスのヴァイオリン協奏曲第3楽章の冒頭に似ているとの指摘があるが、確かに似ている。ブルッフの協奏曲はブラームスより1年早く世に出ており、ブラームスがその影響を受けた可能性はある。



樫本大進のヴァイオリンは、ブルッフの、人間の悲しみ、その癒し、そして生きる勇気を表現したこの傑作を見事に再現した素晴らしい演奏だった。

アンコールにバッハの無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番を聴かせてくれた。

プログラム後半のブラームスの交響曲第4番は第1番と甲乙つけがたい傑作だ。第1番はかなりベートーヴェンを意識して書かれているのは周知のとおり

である。調性も運命交響曲と同じハ短調で終楽章では共にハ長調で終わる。それに引き換え、第4番はブラームス色を存分に発揮した最もブラームスらしい作品だ。ホ短調ではじまりホ短調に終わる、ブラームスの哀愁に満ちた傑作だ。

専門家の解説によれば、当初は擬古的な手法を多用し、技法が複雑過ぎて難解であると批判されたそうだが、現在では古い様式に独創性とロマン性を盛り込んだ円熟した作品として評価されている、とある。実は私には擬古的な手法を多用した技法というのはとても理解できない。しかし独創性とロマン性が盛り込まれている点は十分聴き取れる。例えば、第1楽章52小節目からはじまるホルンの調べ。なんと哀愁に満ちていることか。末尾の譜面を参照されたい。ブラームスはホルンの使い方が卓越している。第2楽章の冒頭の滑らかなホルンの第1主題はその典型だ。やがてチェロの侘しさを湛えた第2主題へと流れてゆく。第3楽章は一転明るく力強い楽章だ。終楽章は主題と30の変奏からなる。コードが第31変奏を兼ね、ホ短調の3拍子で重厚に幕を閉じる。

ドレスデン・フィルのステージは指揮者を囲むように左から第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロと並び、チェロの後ろにコントラバスが配置されている。

指揮者のドナルド・ラニクルズはイギリスから爵位を授与され、“サー”の称号をあたえられている指揮者で、経歴としては申し分がないのだろうが、不満が残った。ドレスデン・フィルは、ベルリン・フィルやバイエルン放送響のA++ランクまでとはいかないが、A～A+ランクのオーケストラだ。今年からラニクルズが首席指揮者になったのだが、ドイツの名門オーケストラを率いるのは荷が重いのではないか。ブラームスの交響曲くらいは暗譜で振ってもらいたいものだ。さらに驚いたのは、アンコールで演じた超有名なブラームスのハンガリー舞曲第5番さえ譜面を見ながらの演奏だった。しかも、譜面をいっぺんに2ページめくってしまって、慌てて修正するなど見苦しい。正直に言って、アンコールを譜面を見ながら振った指揮者を見たことがない。スコットランド出身のラニクルズは基本的にドイツ系ではないということだろう。ちなみに、これは指揮の技量に関係ないが、彼は左利きの指揮者だ。左手にタクトを持って振る。左利きの指揮者もはじめて見た。

ドレスデン・フィルは弦の糸乱れぬアンサンブルが見事だった。ブラームスの4番などは何百回となく演奏してきたであろう。指揮者なしでも演奏できるのではないか。



